

「隆寛律師の「一念多念分別事」と

親鸞聖人の「一念多念証文」の

排反性と共通性について!!」

原 田 知 成

親鸞聖人は、自分の敬慕する隆寛律師の「一念多念分別事」と聖覚法印の「唯信鈔」を各々釈して「一念多念証文」と「唯信鈔文意」の二本を著したのであるが、本章では「一念多念分別事」と「一念多念証文」を比較してその真意の排反性と共通性について若干ふれてみたいのである。

一念多念についての論争は律師の頃には、特に栄んであつたようで、古今著聞集には聖覚法印が後鳥羽院へ参上した時、この事について後下問のあつたことを伝え、「民経記」嘉禄二年九月の記事にも一念方、多念方の名が見えている。凝然の「浄土法門源流章」にも一念方として成覚、法本、多念方として隆寛の名が見えていることでも明らかである。

しかし、「分別事」も「証文」も共に、一念多念に偏

執すべきでないことを述べているが、その内容はかならずしも同じであるとは理解できない。即ち、「分別事」では一念も多念も共に称名行であつて、称名の一声を一念と云い、称名の多声を多念と云つてゐるが、「証文」では一念は信心のことであり、多念は称名のことである。「分別事」に

南無阿弥陀仏となふことは一念無上の功德をたのみ、念広大の利益をあふくゆへなり。しかるにいのちのひゆくまゝには、この一念が二念三念となりゆくこの一念かやうにかさなり、つもれば一時にもなり二時にもなり、一日にも二日にも一月にもなり云云

とあつて一念は称うる一念であり、其一念が積つて多念となるのである。所が「証文」（法要卷二三）では、一念といふは信心をうるとききはまりをあらはすこととはなり

とみえて、この一念の信心の時、ときをへず、日をもへだてず往生を得るとされるのである。要するに「一念をひがことゝおもふまじきこと」の段は信一念の義をもつ

てつらぬかれている。多念に関しては「証文」（法要卷二ノ十五）に本願の乃至十念を釈して

すてに十念とちかひたまへるにてしるへし。一念かき  
らぬといふことを、いはんや乃至とちかひたまへり、  
称名の遍数さたまらずといふことを。

とせられる如く、称名の遍数に定まらず一声も多念も悉くを、此の中に攝めてゐる。要約すると、同じ一念多念を取り扱いながら「分別事」は称名の一多即ち行の一多であり、「証文」は信一行多、即ち信行に亘つて一多であつてこの点では両者の差異を認めねばならない。

しかし、両者の共通点についてみると、「分別事」は行の一多を以て示してあるから、その一念多念の關係は一念が積つて多念となるのであるが、その一念は実は多念を予期しない一念であつて、毎日臨終と考へて、その一念を限りと思ひ、その一念は無上の功德、広大な利益を仰いで往生決定の思ひに住し、多念功を成してと云う考へは持たない。そこで多念でなくてはならないと多念を偏執すべきではなく、しかも各自の命が延びるとおの

ずから多念となるのである。故に一念でなくてはならないと一念を偏執すべきでないとしたのである。「分別事」に

多念はすなはち一念のつもりなり。そのゆへは人のいのちは日々にけふやかきりとおもひ、時々いたゞいまやをはりとおもふへし、無事のさかひは、むまれてあたなるかりのすみかなれば（中略）、たゞいまにてもまなことはつるものならは弥陀の本願にすくはれて極楽浄土へむかへられたてまつらむとおもひて、南無阿彌陀仏となふことは、一念無上の功德をたのみ、一念広大な利益をあるくゆへなり。しかるにいのちのひ行くまゝにはこの一念か二念三念となりゆくこの、一念かやうにかざなりつもれば一時にもなり二時にもなり（下略）

と示してあるので其意味は明かになるのである。

親鸞の「証文」の方はどうかと云うと、本願の名号を聞いて疑わざる信の一念に名号を廻向せられ、仏の御ところに攝取せられるから正定聚に住する、正定聚に住す

るから御名を称える、それで称名の遍数の定りはない、命終らんまで御名を称えるのである。故に一念でなくては云うのでも多念でなくてはと云うのでもない。今このことを実証すると、「証文」に、

開其名号といふは本願の名号をきくとのたまへるなり

(中略)信心は如来の御ちかひをきゝうたかふころなきなり(中略)一念といふのは信心をうるときのきはまりをあらはすことはなり。(中略)廻向は本願の名号をもつて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり(中略)真実信心をうればすなはち無碍光仏の御ころのうちに攝取してすてたまはざるなり。攝はおさめたまふ。取はむかへるとまうすなり。おさめとりたまふとき、すなはち、とき日をもへたてす、正定聚のくらゐにつきさたまるを往生をうとはのたまへるなり。

(法要二 己下)

(前略)念仏せんこと、いのちをはらんまてとなり。

十念三念五念のものもむかへたまふといふは念仏の遍数によらざることをあらはすなり(同十九)

と見えていて、両書は取扱ひ方は異つても、その意は同一であることがわかるのである。

「分別事」がたゞいまにても命終らば極楽浄土へむかえられると思つて南無阿弥陀仏と称えるは、一念にある無上の功德をたのみ、広大の利益を仰ぐからであるとしているが、これは一念も往生を得、その一念が積んで多念となるものであるから、多念も往生を得るのである。そこで要するにその無上の功德、広大の利益を与えられることをたのみ得るか否かにかゝつてくる。その功德利益とは即ち名号のもつところのものである。これをたのみ仰ぐとは名号の力をたのみものであつて即ち他力をたのみのである。故に他力をたのみものは一念も往生を得るが、然らざるものは多念も往生を得ない。これが隆寛の「自力他力事」に念仏に自力他力の別あることを分別せられた所以である。親鸞も又、「証文」に他力をたのみ、本願名号の力を仰ぐことこそ肝要であるとして、一念多念偏執と否とは畢竟他力をたのみか否かにあると見ている。

こゝに隆寛と親鸞の重大なる共通点を見出すと同時に親鸞が隆寛を先輩として仰ぎ聖寛と同じように同行として敬慕したる事情が理解出来るのである。

## 往生拾因の研究

平井義孝

日本に於ける浄土教は、法然の一宗開立によつて大成されたのであるが、それまでの日本浄土教はどのようなものであつたのだろうか。それを知る手がかりとして、永観の「往生拾因」にみられる浄土教思想を考えてみたのである。

「往生拾因」の才一因に、称名の功德を強調している。即ち、

「弥陀名号中即彼如来從初發心乃至仏果、所有一切万行万徳皆悉具足無有欠減。非唯弥陀一仏功德、亦攝十方諸仏功德。一切如来不離阿字故。」

と述べ、弥陀の名号は阿字を離れないから万行万徳を具足すると説くのである。この阿字観をもつて弥陀の名号の功德を強調する事は、彼が未だ密教的な域を出ていないことを示すものであり、又彼の特色あるものである。才八因に於て、一心に称念すれば、三昧発得の故に必ず往生を得るとのべ、

「夫諸法本無自在、唯是一心所作。流転生死心染相、趣向菩提心淨相、但散心事難事、專念事易成、（中略）是一心之力也。染淨諸法皆以如是、往生淨土業豈不依一心哉。」

と言つている。諸法はもとより自性がなく、全て一心の作であつて、散心によつては一心とならないから、何事も成じがたく、專念は一心を得るから何事も成じやすいのである。三昧を発得して達成せられると説くものである。

又永観は才八因に、

「行者廃余一切諸願諸行、唯願唯行念仏一行。散慢之者千不一生、專修之人万無一失。」